

# 落語入門



★白水ま衣（落語好き）と竹中優子（落語初心者）による落語の世界への入り方についてのフリートークペーパーです。

竹：こんにちは。私は落語に興味はありますが、じゃあどの噺家さんの落語会に行けばいいのか？どんな風に落語を聞けば良いのか分からない所があつて、実際に落語に馴染んではいません。落語を聞いてみたいなあという気持ちは前からありましたが、ちよつとキツカケがない感じ。今回のポエイチは「詩と落語の世界」がテーマということで、これを機に落語に触れてみたいんです。今回は落語愛好家の白水さんに、落語の楽しみ方を聞きたいです！

白：私もただ好きだけで特別な知識があるという訳ではありませんが、よろしくお願いします。

竹：さつそくですが、白水さんは何がキツカケで落語を聞き出したんですか？また普段はどんな感じで落語を聞いていますか？

白：もともとは母が落語好きで、小学生の頃から落語を聞くことはありましたが、最初からはまったくという感じではなかったです。すばらしいな、かつこいいなどは思うけど没頭はできないというか。でも、十年ほど前、柳家小三治師匠のDVDを母と一緒に見る機会があつて、小三治師匠のことを大好きになつたんです。落語を好きになるというより、ひとりの噺家を好きになりました。そこから小三治師匠の師匠とか、兄弟弟子の方とか弟子の方とか、どんどん広がつていきました。テレビやラジオで演芸番組を鑑賞したりインターネットの配信サービスを利用したりしました。

竹：なるほど。好きな噺家さんがひとり見つかったんですね。好きな人がひとり見つかるのは大きいですね。小三治師匠の魅力というのは、どんなものだったんですか？

白：抽象的な話になるんですが、余計なものをそぎ落として、登場人物になりきって、その人の心で語ることを大切にしている所、また「落語は笑わせようとするのではなく、観客が思わず笑ってしまうもの」と仰っていて、無理にギャグを入れるのではなく、落語が本来持っている面白さを味わわせてくれる所です。

竹：今のテレビ番組とかつて、まさに無理に笑わせてくる力が強いと感じていて、その話にはハツとさせられるものがあります。話は変わりますが、例えば映画との楽しみ方の違いってどう思われますか？私は映画とかテレビを見慣れていて、はじめて落語を聞いた時にちよつとそのギャップに戸惑つたんです。落語を楽しむコツが分からなくて、正直ちよつと物足りなく感じました。後から思うと、ストーリー展開そのものを追いすぎたり、話から上手く想像が膨らませられなかったことが原因かなと。今回また落語と触れ合つて、いくつか話を覚えていく中で、落語はストーリーそのものというより、何というか観客というよりある種監督的な視点で、ちよつと遠くから見ると感じが必要なのかなと思えました。私としては話の筋を知っていた方が、落語が楽しめる感じでした。そういう風にコツを掴むと、噺家さんの技術が分かつてきたりして。

白：監督目線というのは分かる気がします。テレビドラマとかだと、「観てすぐ分かる」ことが前提で、ブラスの要素を楽しみ感じですね。落語はどちらかと言うと本を読む感覚に近くて、噺家さんの語る登場人物が頭の中で動いていく感じですね。

竹：そうですね。読書に近いです。でも完全に同じではないですね。

白：落語独自の視覚情報もありつつですね。でも私も落語を聞いて、すばらしいなと思うけど心から楽しむ、までは至らない時期がありましたね。

竹：ほうほう。それが変化していったんですか？

白：三遊亭円楽さんがプロデュースされている「博多・天神落語まつり」に行つたんです。いろんな番組があつて、どの回に行つたらいいか分からないから、笑点メンバーが沢山出ているアンソロジーみたいな回を選んで。それで林家たい平さんをはじめ観て、それがすこく身近な感じで良かったんです。その場で起こつたハプニングも自然とギャクに取り入れたり。それまで聞いていたのは昭和の名人の、どこからどう見ても完璧な落語でしたが、こんな落語もあるんだなと思いました。その時は入つていけなさは全くなく、心から楽しめました。

竹：誰から聞くか問題について、ちよつと聞きたいです。誰から聞くかは大きいですね。落語といつても幅広いわけ。

白：波長が合う人が見つかるというのが大事ですね。逆に言うと、最初に聞いた人が合わなくてもそれが全てではないです。

竹：波長、まさに波長ですね。話は変わりますが、以前に短歌と落語が似ているって話を一緒にしましたね。

白：そうですね。

竹：短歌も鑑賞のためにはちよつとしたルールを理解する必要があります。それは、短歌には書かれていない部分、余白があつて、それを読むためのルールだと思ふんです。書かれていない世界をいかに味わうかという所に醍醐味がある感じが落語にも通じるように思えます。助詞の使い方とか語順とか言葉の細かいニュアンスが大事になってくるんですね。

白：考えてみれば、語らないことで何かを語るような、余白がたっぷりあるような噺や演じ方が好きですね。

竹：以前白水さんがお勧めしてくれた三遊亭圓丈師匠の「遙かなるためきうどん」を聞きましたが、あれもそういう感じでしたね。私もすこく好きでした。フィクションなんですけど、もしかしたら私の知らないところで本当にこういうことが起こっているのではないかと考えると楽しかったです。なの

で、白水さんが短歌が好きで落語が好きというのは一本の線で繋がる感じが私にはします。

白：指摘されると自分でもそんな気がしますね。

竹：落語を聞き慣れると、音楽や映画のように、単純に選択肢が増える予感がしています。白水さんから他に何か言いたいことはありますか？

白：落語を楽しむためには特別な知識が必要だと思つている方が多いように思うんですが、本当にそんなことはなくて、素直に心を委ねる、単純に楽しめばいいものだと思います。

竹：特別な知識が必要、それは私も思い込んでいました。

白：また落語を聞き慣れていくと同じ話でも人によつて演じ方が違うとか、微妙な言葉のニュアンスの違いとかその差異による面白さが分かつてきます。小説や詩歌が好きなら、それに留まらず「言葉に興味・関心がある人」は落語の世界を楽しむ可能性が高いんじゃないかと思つています。

竹：素直に心を委ねるといふのは分かる気がしています。笑点とか観ていても、斬新というより定番の楽しさというか、定番を楽しむ、頭で考えるのではなくて楽しむという感覚がありますね。だから笑点を観ると、何かが不思議と安定するように私は感じます。

白：落語には人間のちよつと駄目なところや人間の哀しさを受け止めてくれるやさしさがあるように感じていて、それを相手も自分も一緒になつて笑い合うところに魅力がありますね。

竹：笑い合う、いいですね。笑い合うためには、やっぱり生の寄席に行くのが一番なんですかね。

白：そうですね。醍醐味ですね。

竹：じゃ、やつぱりここはポエイチ寄席に来てもらうのが一番……。

白：あ、上手くまとまりましたね。

竹：おあとがよろしいようで。フリートーク終了です！